

第27回「大阪の消防大賞」受賞者

消防団員の部

所 属	受 賞 者	功 績	概 要
和泉市消防団	363人	<p>「自分たちの地域は、自分たちで守る。」住民主導型の防災訓練を実施し、防火防災意識の高揚につなげた。</p> <p>同市では、阪神大震災を機に平成7年度から防災訓練を行っている。14年度から、中学校区を単位とした住民参加型に変更したが、参加機会が限られるため、消防団は「ブロック別防災訓練5カ年計画」を提案した。</p> <p>市の防災訓練に加え、毎年11月の第1日曜日を防災の日に設定。市内を4ブロックに分け、その地域に即した対策を住民主導で考えてもらう仕組みに切り替え、住民が積極的に関われる訓練を実施した。</p> <p>訓練を通じて地域が1つになり、消防団への信頼が高まったのはもちろん、住民の自主防災意識の向上に貢献した。</p>	
岬町消防団	109人	<p>連続発生する不審火に、消防団をあげて対策を行い、地域住民の不安を取り除いた。</p> <p>平成22年12月から23年3月までに同町内の同じ地域で計7件の不審火が発生。同町消防団では、大塚馨団長を先頭に、6ヶ月を超える特別警戒態勢を敷いた。週2～3回、午後8時半～11時半まで地区の巡回を行った。巡回回数が積み重なるにつれ、迅速な初期消火の体制を確立していった。</p> <p>それまで地区内の不審火の6割が全焼だったが、巡回開始後、3割に減少した。</p> <p>11月には非現住建造物等放火の疑いで男が逮捕された。109人の団員が参加した警戒活動は、町を放火犯の恐怖から救った。</p>	

## 消防職員の部

所 属	受 賞 者	功 績	概 要
豊中市消防本部	南消防署 野村俊之 小曾根第1警備 担当出張所長 26名	<p>昨年11月9日午後5時ごろ、非番日で自宅にいた野村消防司令は、火事を知らせる町内のサイレンに気付き、現場へ急行。</p> <p>すでに、一戸建て住居の窓や玄関から炎が飛び出しており、まだ消防隊も到着していなかった。煙の向こうに住人の男性（当時76）の手が見えたため、全身を水でぬらし、玄関から中へ進入。横たわっていた男性を抱え、屋外へ救助した。</p> <p>男性は病院に搬送され、その後、無事社会復帰を果たした。消防司令の果敢な行動が、尊い命を救った。</p>	
泉佐野市消防本部	りんくう消防署、 中消防署（7人）	<p>昨年4月1日午後4時ごろ、泉佐野市内で発生した火災で、逃げ遅れた男性（当時81）を救出した。</p> <p>最先着隊が到着したときはすでに火勢は強く、煙が建物全体から漏れ出している状態だったが、男性が中にいるという情報があり、ポンプ隊と救助隊が内部へ進入した。</p> <p>住居は煙が充満し、視界は30センチほど。さらに炎が天井にまで及んでおり、厳しい活動を強いられた。隊員らはライトを照らしながら進み、寝室にいた男性を発見、無事救助した。</p> <p>男性は救助された当初、意識がなく危険な状態だったが、迅速な救助も幸いし、2カ月後に退院した。</p>	
枚方寝屋川 消 防 組 合 消 防 本 部	情報管理室指令課、 枚方東消防署 （10人）	<p>枚方市内で発生した救急事例。指令課員と消防小隊、救急小隊の見事なチームワークで人命を救った。</p> <p>昨年11月25日午前6時ごろ、男性の呼吸が止まっているとの通報を受け、消防小隊と救急小隊が同時に出動。指令課員は、通報者に電話で人工呼吸などの方法をレクチャーした。</p> <p>到着時、男性（当時31）は呼吸をしていなかったが、懸命の処置で心拍が再開。その間も、消防小隊は救急車両を素早く巡回させるなど迅速な搬送に寄与した。</p> <p>男性は搬送後、約20日後に無事退院した。</p>	
吹田市消防本部	北消防署（7人）	<p>昨年1月30日午後6時ごろ、佐浮いた市内の自宅で夕食中に突然苦しみだし、意識を失った女性（当時77）を、救急隊とポンプ車分隊との見事な連携で救助した。</p> <p>約5分後に現場に到着した救急隊は、ただちに心肺蘇生法を実施。ポンプ車分隊とともに蘇生法を継続し、自発呼吸が再開した。</p> <p>当時、ドクターカーが他市へ出動中という条件の中で、連携活動訓練の成果が十分に発揮し、救助した。その功績は顕著である。</p>	

所 属	受 賞 者	功 績	概 要
富田林市消防本部	富田林市消防署 (3人)	救助工作車を操る救急支援隊が先んじて到着、救急隊への迅速な引き継ぎにより人命を救助した。 昨年8月21日午前11時ごろ、富田林市内で女性が突然意識を失ったという通報があった。当時、現場から1番目、2番目に近い救急隊が出動中で、急遽救助工作車が指示を受け、通報から約5分後に現場に到着、女性に救命処置を施し、女性の呼吸を再開させ、病院へ搬送。女性はその後、社会復帰を果たした。 同市では救助隊員が、救急隊員と合同で応急処置訓練を実施しており、日頃の訓練が実を結び住民の危機を救った。	
堺市消防局	堺消防署、 同局警防部警防課 調査係(8人)	蛍光灯の部品から出火した火災で、原因を部品の不具合と特定、製品の大規模リコールにつなげ、全国的な火災予防に貢献した。 平成22年12月に堺市の住宅で発生した火災で、火は床を焼いた程度で消し止められた。火元は住宅内の蛍光灯からだった。 担当者は、分解検証や聞き込み調査などを重ねた結果、器具に組み込まれた部品が、わずかに放電する不具合を起こし、発火に至ることをつきとめた。 調査結果を受け、メーカーは全国に流通していた該当製品48万台のリコールを行った。類似の火災を二度と発生させないという担当者の熱意が、さらなる火災の芽を摘んだ。	

## 特別賞

受 賞 者	功 績	概 要
緊急消防援助隊大阪府隊 (大阪府下全33消防本部で組織)	昨年3月の東日本大震災の被災地支援のため「緊急消防援助隊大阪府隊」を組織。岩手県釜石市、大槌町を中心に被災地で行方不明者の捜索などの救助活動に当たった。 現地では大きな余震が続き、吹雪にも見舞われる悪条件の中、残された情報を頼りに、懸命に活動する姿は、被災地へ復興への勇気を与えた。 捜索活動のほか、海外の緊急援助隊の支援や、東京電力福島第1原発での放水活動を補助するなど、被災地でのさまざまな活動に従事。順次人員を交代しながら、のべ1092人の職員が活動した。	